

島崎藤村における国際性と文明批評

細川正義

一

藤村は明治三十七（一九〇四）年一月に、作中の主人公に海外への渡航を経験させる設定を用いた最初の作品『水彩画家』を発表している。藤村三十二歳、小諸義塾の作文教師として赴任して約五年が経過した時の作であるが、藤村自身はその時は未だ海外経験は持っていない。

藤村は明治二十（一八八七）年九月、十六歳の時、英語を学ぶことを求めて明治学院の一期生として入学した。明治学院は欧米の教育方法を実践し、教員も多数欧米人が担っていた。そうした環境であり、藤村の外国への思いも重なり、当然早くから欧米への旅も憧憬されたであろうが、例えば後年初めてフランスへの旅に向かった時のことを『海へ』の中でこのように回想している。

父上。私はあなたの黒い幻の船に乗つて、あなたの邪宗とせられ異端とせらるゝ、教の国へ兎も角も無事に辿り着きました。この私の旅は恐らくあなたから背き去る行為であつたかもしれません。外来のものと言へば極力排斥せられ敵視せられた程の

強い古典の精神をもつて終始せられたあなたが仮りに今日までも御存命で、子としての私を見まもつていて下さるとしたら、そもそも私が英語の読本を学び始めようとした少年の日にそれを私に御許し下すつたあなた自身の寛大を今さらのやうに後悔されたかも知れません。けれども私のために御心配下すつたあなたの心は長く私に残りました。そのあなたの心は私のたましいの奥底にとぼる一点の灯火のやうに消えずにありました。(略)私に取つては西洋はまだまだ黒船でございました。幻でございました。幽霊でございました。私はもつとその正体を見届けたいとぞんじました。そして自分の夢を破りたいとぞんじました。その心をもつて私は更に深く異郷に分け入り一筋の自分の細道を辿り行かうと致して居りました。

〔地中海の旅〕六(四)

フランスへの旅は大正二(一九一三)年、藤村が四二歳になつてからである。長年憧憬してきた外国への旅が実現した深い感慨が記された文章であるが、明治学院に入学し「英語の読本を学び始めようとした」頃から長い年月の間、強いあこがれを抱いてきた欧米への夢であつたが、一方、国学の思想に生涯を過ごし尊王攘夷の思想をよしとする父の教えを守つて、〈欧米〉は何処までも憧憬の世界として心の裡に閉じこめてきた。例えば、藤村は、明治二十六(二八九三)年一月から七月にかけて、京都から大阪、神戸、四国高知、吉野をめぐる関西漂泊の旅をしているが、その時に神戸の港を見下し、はるかかなたの欧米を憧憬した思い出を後年、渡仏直前に『眼鏡』(大正二年二月)と題した作品に於いて

・さん／＼旦那も歩いて、いくら草臥れました。そこで須磨にある漁師の家を借りまして見物かた／＼足を休めました。名高い一の谷も近くにあります。一の谷の合戦なんてよく言ふぢやありませんか。あそこです。須磨には敦盛蕎麦だの、光源氏の墓だの、須磨寺の青葉の首だの、種々な物がありました。が、明るい海を眺めた方が私は退屈しませんでした。(『眼鏡』(大

正二年二月)六)

・白―赤―黄―神戸は大きな港だけに、澤山蒸気汽船や、帆船や、荷船、小舟などの集って居るのを見ると、種々な色が港内にありました。それから、ツンツン立って居る帆柱だの、ピカく光る青い波だの（後略）（『眼鏡』七）⁽²⁾

と書きとめて居る所からも、藤村が明治二十六（一八九三）年の神戸への旅の時に「ピカく光る青い波」の彼方の欧米への旅を遠望していたことを推測することが出来よう。

藤村の海外体験、ヨーロッパへの旅は関西漂泊の旅で神戸の港から遠望した時からでも二〇年が経過してからのことになり、『海へ』『地中海の旅』が示すようにその長い間一貫して仰望し続けてきたことを考えれば、明治三十七（一九〇四）年の頃に『水彩画家』を執筆していることは注目されることである。

『水彩画家』は、小諸義塾の同僚丸山晚霞の渡米と帰朝をモデルにしており、晚霞が、小説の主人公が自分であるにもかかわらず人物像があまりに自分と違い過ぎるという抗議文を「中央公論」に発表したことはつとに知られているが、確かに藤村の軽率さは否めないとはしても、主人公鷹野伝吉は事象としては丸山晚霞の渡米体験を素材にしてはいるが、それよりも伝吉の人物像は藤村自身の心情を中心にしており、後に『家』で再び描いた妻との間で新婚間もなく生じた夫婦間の問題も詳しく描いており、その意味でも、藤村自身が晚霞の抗議に対して「モデル問題が（略）丸山君のごとき親しき人々の手により提供されたことを羞じた」としながらも「けれども私は行ける処まで行つて見るより外に、自分の取るべき道は無いと思つた」と決断したことも納得のいくところである。藤村はこの『水彩画家』のすぐ後に、飯山町真宗寺住職井上寂英の娘婿藤井宣正の英国、インドでの体験を材料にした『椰子の葉蔭』を書いているが、同時期に主人公が欧米を旅する『水彩画家』や『椰子の葉蔭』を続けて書いている心情には、藤村に於いて長い間潜めた憧憬として抱き続けてきた欧米への旅がこのころに特に強く意識されていたことも推測で

さるのである。そして、その憧憬のあり方としては、例えば鷹野伝吉が一年間ヨーロッパをはじめとして世界の各地を旅して帰国し、六十日余りの航海を経て小諸の街へ戻ってきたところから始まる作品が、はじめに伝吉の心境を次のように書きとめている点に注意しておきたいところである。

新しい生涯は開けた。

過去を考へると、自分の境遇は悲惨で、貧しい寂しい月日を送つて居た為に、伸のしたいと思ふ羽も伸すことが出来なかつた。新しい家庭、新しい交際、新しい画室、新しい製作——何といふ美みし思想しんがだらう。現世の歓楽の香かほを放肆はじまに嗅く時は、今到着した。斯う考へて、伝吉は此山家に帰つて来たのである。(傍線細川、以下同じ) (『水彩画家』壺)⁽³⁾

洋行を経験して帰国した伝吉が、そのことによつて過去の「貧しい寂しい月日」を一掃して新しい芸術の人生が開けるといふ期待に胸を膨らませて、夢に満たされて帰国したことをまづうかがわせるのである。更に、

漠然とした幸福しあはせな空想に手を引かれて、伝吉は北佐久の谷を彷徨さまよつた。(略) 到るところの杜も林も、豊富な画材を眼前に展げて居た。伝吉は餌に餓うれた若鷹のやうな鋭い眼付をして、其処此処と彷徨さまよひ歩いた。彷徨さまよひ歩き乍ら、風景に向かつて宣告せうこを与へた。

『なかに、画いて見せる。——きつと画いて見せる。』

斯ういふ時には、きまりで仏蘭西の名高い田園画家を憶出して居た。

新しい画室と住宅を建てる為に、伝吉が見立てた場処といふは、新町の町はづれ——とある岡の上。もとこの岡の上は桑畑。(略) こ、を新築の地と定めたは、野趣を好む伝吉の心に深く適つたからで。

伝吉は又、この新しい住宅すまひを飾る為に、古今の名画の写真、遍歴した画堂の目録、美術史、美術家の伝記、瑞西スイスの木彫、独逸の花瓶、倫敦ロンドンの置時計、亜米利加の人形、(略) 港々の絵葉書などを蒐集あつめて来た——別に巴里の絵扇一本、其はお初に

持たせて見るつもりで。

〔水彩画家〕 壹

と記しており、渡仏によつて身近に感じるようになった「仏蘭西の名高い田園画家」を思い出し、自分もあのような画を「きつと画いて見せる」と意気込み、そのためにはまず形から整えようとして「新しい画室と住宅を建て」なければと考えるのである。そのように洋行帰りの自分には特別な視野が広がり、芸術の力が備わっていると信じ、これらの芸術への夢に心が奪われていくのであるが、しかし、ある時、実生活において妻の初子がかつての婚約者にあてた手紙を発見してから状況が一変する。そして伝吉は激しい嫉妬の中を煩悶する。

あゝ、新しい家庭も、新しい交際も、新しい画室も、あたらしい製作も――すべて空の空に思はれた。六十日あまりの航海の間、毎日のやうに考へて楽しんで来た新しい家庭、その生活を始めてから今日迄に、果して何が残つたであらう――たゞ後悔の涙ばかり。新しい交際には何が残つた――離別の嘆より外に残るものはない。新しい画室は物置になつて、新しい製作は嘲罵あざわらひの種。

〔水彩画家〕 拾壹

妻の心を知つたことでそれまで意気込んでいた洋行帰りとしての未来への夢が一気に瓦解してしまふほどの苦痛に陥るのであるが、しかし、伝吉のそのような精神的な弱さは、初めから母親には見通されていた。次の箇所がそのことを示している。

伝吉が洋行から帰つて新しい希望と夢になかは有頂天になつて、連日客を呼んで祝いの宴を開いている時に、母親は伝吉の妹お勝との会話で、お勝が

『だつて左様ぢやござせんか。まあ、洋行前と比べて御覧なされ。奈何どんなに兄あにさんも幸福しあはせ、姉あねさんも幸福しあはせだが——私も嬉どくしくて私も嬉どくしくて涙なみだがこぼれた。』

と、兄が洋行したことに酔う姿に幸福を感じるお勝に対して、

『しかし、おめへの言ふのは表面うへばかりだに。』

『あれ母親おつかさんは直さに左様言さうひなさる。ほ、ゝ、ゝ、私に言はせると、第一沈着おちついて来なさりやした。それにあの挨拶振りには魂たまげ消けした。洋行して来ると、違いやすはな。』

『私おれは又、変つて帰つて来たとは思はねえ。』

と言ひ、更に次のように言い切るのである。

『それだから、おめへの目は未だ若えわさ。去年の秋まで無暗よみかに世の中を悪く言つて見たり、高い山に登つて野宿のしゆくをして見たり、深夜よみかに剣を抜いて詩を吟じて見たりした兄あにさんと、今年の秋洋服を着こんで、葉巻くはを咬くはへて帰つて来た兄あにさんと——ねつから内部うちは違はねえ。去年の秋は彼方あちの極端ごくたんなら、今年の秋は此方こちの極端ごくたんだ。(略)』

(『水彩画家』 弐)

帰朝後連日宴を設け、あたかも自分が洋行を経験すること以一躍飛躍して芸術家として開花することが約束されているかのようにふるまってきた伝吉に対して母親は、伝吉は「彼方あちの極端ごくたん」から「此方こちの極端ごくたん」へ移動しただけで「ねつから内部うちは違はねえ」と断言するのであるが、実際母のその予想さくが的中したかのように伝吉は、すぐあとで、かつての婚約者なかみへの手紙を見ただけで忽ち夢から覚醒して、妻への不信を募らせ、将来が約束されていたかのように語っていた芸術への気力すらも損なうような気持ちにさせていくのである。

『水彩画家』はそのように伝吉の洋行へのロマンが、妻の過去の恋人への手紙を見たというリアリズムに脆くも屈していく作品であるが、しかし、この作品の肝心なのは夢の覚醒そのものではなく、それによって伝吉がとつた行動の方により注目すべきであると考ええる。つまり作品末部において伝吉を描いた次の描写である。

家庭の解散もまあ見合せることにしたと言出した。其を聞いた時のお初も奈何に胸から石の落ちたやうに感じたらう。この無邪気な妻はホツと溜息を吐くのであつた。

同じ夫婦の第三の結婚——といふことが人の一生に言へるものなら、それは是夏の朝の二人の情である。去年の新しい生涯も、今年是最早旧い生涯と成つた。伝吉は復た別に新しい生涯を尋ねて此世の旅に上る人となつたのである。

〔水彩画家〕拾弍

即ち、妻の手紙を発見した当初は、「吾家は解散して」「漂泊の生涯を慕う」（四）と考えていた伝吉が、このように、行き詰つた時に一切のものを捨てて独り漂泊の旅に出るのではなく、「家庭の解散もまあ見合せ」、現状を受け入れて苦渋の現実の中にとどまって、その「現実」の上に立つて「新しい生涯を尋ね」ようとしている所である。先に引用した、洋行帰りの夢に酔う伝吉を冷めた目で見ている母親の言葉に振り返って問えば、この作品がはじめからこのような伝吉の展開を前提にしていることがわかる。そして、こうした伝吉の変化は、藤村の創作が詩から散文へ移行していく中で、ロマンチズムからリアリズムへ展開していく視点として従来から指摘されてきている所であるが、ここで特に注目しておきたいのは、こうした状況において、それまでは欧米への旅と旅の成果のことを強く意識している主人公が、現実の「家」にまつわる問題に直面することで旅と外国への憧憬をいったん思い直して、現実的に立脚した眼差しを採ろうとしている点である。

そのことに加えて、例えば

丁度、流浪する旅人のやうに、伝吉は道傍の石の上に腰かけて、眺め入った、眺め入り乍ら考へ沈んだ。（『水彩画家』四）

とあるように、伝吉が今直面していることを直視して改めて問おうとしているみずからの心境と、今起こっていることをじっと「眺め入る」姿が描かれている点である。この眺め入る姿の描写は『破戒』になると圧倒的に多くなるが、憧憬から凝視への意識の変化を示す態度として注目されるこの時期の藤村が、単に、自己の内奥を凝視することにとどめるのではなく、彼が青春時代から抱き続けてきた欧米に向けての憧憬をいつたん覚醒させた形で留めることによつて実態凝視への視点を明確にしようとしている点に注目する必要があると考えるのである。

一一

明治三十七（一九〇四）年一月発表の『水彩画家』と同時期に『破戒』の執筆を開始した藤村は、明治三十九（一九〇六）年三月に緑陰叢書第三編として『破戒』を出版した。言うまでもなく『破戒』の執筆意図は、『破戒』執筆直後にあらわした「破戒」の著者が見たる山国の新平民」に次のように記されているところから伺える。

信州の新平民のことで、私が見たり聞いたりした事実を、すこし話さう。

長野の師範校に教鞭を執つた人で、何でも伊那の高遠邊から出た新平民といふことで、心理学が何かを担当して居た一人の講師があつた。私が小諸の馬場裏に居つた時分、隣家に伊東喜知さんといふ小学教師をして居る人があつたが、氏は其人に会つたことがあるとの話だつた。（中略）それから私は新平民に興味を有し、新平民の——信州の新平民のことを調べて見ようと思つたのだが、それに就いて種々の不審を打たれた人もある。いかに信州が山国だからと言つても、貴様の言ふやうなこ

とはあるまい。あまり誇大に過ぎるといふ人もある。私も東京に居る頃は彼様なことはあるまいと思つて居たのだが、信州に行つて住んで見て解つた。(4)

藤村が小諸で住んだのは、小諸馬場裏のもとと士族屋敷だったが、その隣家に住む伊東喜知から聞いた大江磯吉の人生と、彼の悲劇を醸成した日本の歴史と社会の仕組みのことを綿密に調査したうえで『破戒』を執筆したことは夙に知られている。『破戒』は、瀬川丑松の運命の〈真〉を描いたリアリティにおいて自然主義の確立が評価される作品であるが、「破戒」の著者が見たる山国の新平民」にうかがえるように、作者の知った信州地方における人間差別への批判と、実態認識における関心に裏付けられた作品であることも評価しなければならない作品である。そこにも藤村の批評精神の一端が窺えるところである。

続く『春』が、藤村における明治二十六（一八九三）年から二十九（一八九六）年までの日清戦争前後の藤村の内と外との不安定な時期の青春の彷徨を、作品を執筆している明治四十一（一九〇八）年の日露戦争後の若者たちを中心にした不安定で混沌とした時代状況に重ねて執筆している点にも注目する必要がある。同年に発表された正宗白鳥の『何処へ』が示すように、日露戦争後軍国主義政策が進められ、戦後の国民が自意識に目覚め自主と独立精神が醸成されてきている状況に対して、一方で大逆事件の発生が端的なように、むしろそうした国民意識を弾圧していく傾向を強くする時代の中にあつて、その時代に翻弄される青春群像と対峙させながらそこに〈春〉のきざしを求めようとした『春』は、自然主義文芸の代表作品であると同時に藤村の文明批評の意識がリアルに示された作品としても注目される。

次の『家』は、『家』の新刊予告で

事は二天家族の運命に關し、時は十三年の間に亘る。すべて家内生活の光景にあらざるはなし。親と子、夫と妻、兄と弟、叔父甥、叔父姪、従兄弟同志、義理ある姉弟、其他親族の間に隠れたる男女の關係は読者の眼に映ずるものあらん。(5)

と書き留めたように明治三十一（一八九八）年夏から執筆時の明治四十四（一九一）年六月までの十三年間に及ぶ作品の舞台はすべて小泉と橋本の二天旧家の家の中に生じた出来事として展開している。この明治四十年代はまさに、先に触れた大逆事件の嵐が吹き荒れた時であり、その厳しい取り締まりの中で藤村が屋外に起こったことを一切遮断して「屋内の光景にのみ限」って描こうとしたことはその作品構成と時代状況の対比においても見逃せないところであり、執筆時のそうした国家権力による弾圧によって閉塞された時代状況を背景に考えれば、作品が、日本の近代化の動きに取り残されていこうとしている旧家を素材にして、封建時代の旧弊な価値観にしばらくその困難の中で前に向かって進んでいくべき前途を見失い、或いは希望を断たれていく旧家にまつわる群像を見据えて描かれているストーリーはまさに藤村の優れた時代批評、文明批評の眼差しでつらぬかれた作品であると評価することが出来よう。また、作中三吉が姉の家で黒船の図を発見する次の場面である。

（略）先祖が死際に子供へ遺した手紙、先代が移したらしい武器、馬具の図、出兵の用意を細かく書いた書類、その他種々古く残った者が出て来た。

三吉はその中に「黒船」の図を見つけた。めずらしそうに、何度も何度も取上げて見た。半紙程の大きさの紙に、昔の人の眼に映った幻影が極く粗い木版で刷ってある。

「宛然（まるで）——この船は幽霊だ」

と三吉は何か思い付いたように、その和蘭陀船の絵を見ながら言った。

「僕等の阿爺が狂に成ったのも、この幽霊の御陰ですネ……」と復た彼は姉の方を見て言った。

お種は妙な眼付きをして弟の顔を眺めていた。

「や、こいつは僕が貰って行く。」

と三吉はその図だけ分けて貰って、お雪の手紙と一緒に手荷物の中へ入れた。

(『家』下 九) 6

大逆事件という時代のあらしを背景にして、日本の封建的な(家)の実態をリアルに表現しているとして評価される作品が、こうしてかつての父に纏わる出来事として、近代日本の幕開けをもたらすきっかけとなった一八五三(嘉永六)年の黒船の来航の出来事を取り入れているのは、『家』執筆の藤村にとってその時(家)の外で吹き荒れ国民を震撼させた大逆事件の渦中であって、そうした強硬な国家権力によって国民と乖離した困難な時代を誘引することになった遠因として、日本が黒船の来航以来、一方的な諸外国からの圧力に屈して開港を強いられたこと、そしてその中で長年の鎖国の弊害を背負った中で出発を余儀なくさせられた日本の近代化の負の歴史を正しく把握し認識しなければいけないという藤村の時代批評と文明批評の精神が強く息づいているという見方もできるところだと考えられる。

そうした藤村の時代と文明に対する批評への関心が、早い時期から憧憬してきた欧米への旅が実現することによりシビアさと鮮明さを増すことになったのが大正二(一九一三)年三月から五(一九一六)年七月までの渡仏体験である。この渡仏体験は、本稿の初めで触れたように、藤村にとっては長い間強いあこがれを抱いてきた夢の実現であったが、動機はともかくも現実にヨーロッパを旅し、三年余りもの期間滞在し得たことを、こうして帰国して間もなくの『地中海の旅』をはじめとした『海へ』収録の紀行文において明確な口調で表していることは注目されることであり、何よりも帰国すぐにこのように書き表していることは、それだけに藤村において渡仏による収穫をひそかに確信する心情があることがうかがえると見る事ができるところである。その点において注目すべき指摘として今橋映子氏の次の指摘がある。

四十二歳という年齢で渡航した作家・藤村は、フランス語に特に堪能だったわけでもなく、実際の「留学生活」を送ったわけでも、現地の文化人と交流したわけでもなかった。従って、彼の『仏蘭西だより』の中に、フランス文化についての誤認や誤解、あるいは認識不足を指摘することは、たやすい。

しかし、今日の私たちがこの作品を読んで何よりも驚かされるのは、異文化に接した時の、しなやかな観察眼と、謙虚な姿勢である。そしてそれが何よりも良くあらわれているのが、彼がパリという「都市」そのものに向けるまなざしの中なのである。

更に、今橋氏は『平和の巴里』に「再び巴里の旅窓にて」と題して掲載している書簡形式の文章の次の一節を引用している。

今更申上げるのも異なるのですが、私は無暗に西洋の文明に心酔して遙々当地まで出掛けて参つたものでは御座いません。巴里を賛美する為めに斯の机に対つて居るものでも御座いません。けれども自分等に起り易いセンチメンタリズムから万事小癪に触るやうな冷笑的の気分を離れたいと思ひます。感心されるだけ感心したいと思ひます。(中略) 仏蘭西人ほど『スタイル』といふものを重んずる国民も稀でせう。古いロココ式の建築もルネッサンス風の公園も相集り相合奏して一の大きな都会美を形造つて居るやうな巴里へ来て見て、『スタイル』といふものが初めて意味のあるものやうな心地も致します。斯ういふ文明を造り上げた人達の一人々々に就いて見れば随分無器用など思つて驚くことが有る程です。それで居ながら、全体として為たことを考へて見ますと、ある一個の天才が動いて行つたやうな趣を示して居ります。

旅の窓から眺めた斯の町に対する私の想像は『近代の羅馬』といふやうなことに落ちて行きました。(7)

そして、今橋氏は「ここには、物静かな語り口ながら、深い確信をもつて、異国の都市を造形している歴史と、都市計画の存在に気づき始めた「都市論者」藤村の誕生が見える。」と捉えている。今橋氏の指摘のように、藤村には

すでに「しなやかな観察眼と、謙虚な姿勢」が備わっていたことは認めるとして、さらにその上に、日本を離れ西洋フランスにおいて様々な形で異文化体験をすることによって、相対化のまなざしを強くし、より客観的な文明批評眼を獲得していったと見る事ができるところであろう。後に『新生』をあらわした時に、芥川龍之介が『或阿呆の一生』において「老獪な偽善者」という言葉をもって批判したことに対して、藤村は

当時私は心に激することがあつてあゝいふ作を書いたもの、私たちの時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた。荒れすさんだ自分等の心を掘り起して見たら、生きながらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に活き返る日も来たと言つて見たつもりであつた。⁽⁸⁾

と書いている。「時代に濃いデカダンスめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもり」とはまさに、新生事件に対する深い懺悔の思いを抱きつつも、あえてこのことを世間に告白したのは、姪とのインセストの告白が主眼ではなく、大正七(一九一八)年をピークにした不況の嵐の吹き荒れる時代に対する提言をしようとした文明批評・時代批評の精神の表れを見ることもできるのではないか。そのように、かれが、待望の西洋の地に赴き、自己と、祖国日本を相対化する視点を明確にしえたことを確認しておくことが必要であると同時に、帰国に際しての藤村の確信もそこにかかわるのではないかと考えられるのである。

ところで、藤村のフランスでの体験を語るものとして『平和の巴里』の「音楽会の夜、其他」に次のような記事がある。

『欧羅巴へ来て見て、反つて自分の国の方に種々なものを見つけますね。自分の国の好いところを思ふやうに成りますね。』

斯ういふ話が当地に在留する人々の間によく出ます。それについても私は種々なことを思ひ浮かべます。例へば永井荷風君が仏人の研究に促されて十八世紀の日本といふものに多くの興味を寄せられて居ることなぞです。私は今あまりに旅らしい空気に包まれて居るのかも知れません。(略)

西洋の文明が入つて来るやうに成つてから、吾儕日本人は無闇と模倣を事とするかのごとく言はれ、吾儕自らまで時には無定見な国民のやうに思惟します。けれども吾儕の模倣性はやがて吾儕の柔軟性を證するものでは有りますまいか。模倣そのものは、そこに一種の独創を産まうとするものでは有りますまいか。私はまた近頃斯様な疑問に逢着して居ます。吾儕は非常に飽き易い国民のやうに自ら考へて、朝には何を迎へ晩には何を迎へるといふことがよく言はれるけれども、斯く吾儕が飽き易いのは一体何の為でせうか。西洋から新しく入つて来たものは万事が合理的であつても、長い間には存外見飽きのするやうな物が多いのでは有りますまいかと。明治以前のことを想像して見るに吾儕の先祖がそんなに物に飽き易い人達であつたとは、奈何しても私には思はれません。(9)

ここには、渡仏体験が彼を西洋への新しい発見にいざなつただけでなく、自国に対する再認識、再発見をも促された心情が示されている。藤村は「あまりに旅らしい空気に包まれて」いて観念的に考えているかもしれないと断つているが、ここで藤村が取り上げた日本人の「模倣性」に対しては、これまでは日本の近代化の遅れに対する認識からマインナスの面においてとらえられることが多かったのだが、しかし藤村は、自身で西洋を体験して、西洋の文化と日本とを対比させる視点で改めて眺めなおすことによつて、「吾儕の模倣性はやがて吾儕の柔軟性を證するものでは有りますまいか」と肯定的にとらえ、西洋に対して「西洋から新しく入つて来たものは万事が合理的であつても、長い間には存外見飽きのするやうな物が多いのでは有りますまいか」というように対等もしくは批判の視点で示している。この「模倣性」に対するとらえ方についての再認識は一例であるが、ここからも藤村の渡仏体験が彼の批評精神をかなり活発にさせていることがうかがえるところである。

そうした日本への客観的な認識眼に於いて注目したいのは、次の視点である。

『僕は斯様な風にも考へる。印度や埃及エジプトや土耳其トルコあたりには古代と近代としか無い、と言つた人の説には全く賛成だ。幸ひにも僕等の国には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡シンガポールに成らなかつたばかりじゃない、僕等の国が今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思ふよ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つても、皆な封時代から伝はつて来たものの近代化だ。(略)』〔故国を見るまで〕十二(30)

この、日本の「中世」「封建時代」に対する歴史認識は、藤村にとつてかなり大きな発見だったと言えるが、具体的には、『東方の門』で次のように表現している所と対比すれば明確である。

青山半蔵等には中世の否定といふことがあつた。もとよりこの国の中世期に於ける武門幕府の開設に伴ひ王権の陵夷は争ひがたい事実であつて、尊王の念に厚い平田派の学者達が北条足利二氏の専横を許しがたいものとしたのは、当然のことであつた。(中略) 日本民族の純粹な時代を儒仏の教の未だ渡来しない以前に置いた国学者等が、ひどく降つた世の姿として中世を考へるやうになつて行つたのも、これまた自然の帰結であつた。(31)

青山半蔵は言うまでもなく『夜明け前』の主人公と同名であり、藤村の父に対する理解が反映した人物である。『夜明け前』では、半蔵の「中世の否定」を次のように記している。

「王政おうせいの古いにしへに復かへすることは、建武の中興の昔に帰ることであつてはならない。神武の創業にまで帰つていくことであらねばならぬ。」

その声こそ彼が聞かうとして待ち侘びてゐたものだ。(32)

『夜明け前』は昭和に入って書かれた作品であるが、藤村が大正時代初期にフランスから帰国して間もなく執筆した「故国を見るまで」ですでにこの「中世の否定」という「父の思想」を否定する考えを表していることは注目されるところである。藤村は、自ら外国にでかけ、日本を西洋から、そして世界の動向の視点から相対化して見る機会を得たことで、父の時代の主張を改めて問い直して、そして父の思想とは異なる考え、即ち、今日激動の中を超克して日本が日本たりえているのは日本が強固な「中世」という時代を有し、その中世の封建時代からの歴史と伝統がしっかりと守られてきたからだということを発見し、「何一つ日本に好いものがあるか、何一つ世界に向つて誇り得るものがあるか」と自国を批判的に見がちの現代の日本人たちに対して、日本には「封建時代の賜物」としての「中世」という時代があったことを認め、誇りに思うべきであるということをも国民が認識しなければいけないという考えを明確にしていることに注目しなければならぬであろう。藤村の批評眼の最も注目される一点であろう。

この「中世」については『東方の門』において、更に、

五ヶ月もの長さに互る冬季の日本海の活動から、その深い風雪と荒れ狂ふ怒濤とから、この島国を護る位置にあるのも、あの海岸の崖壁である。(中略) この腰骨の強さこそ、北支那からも南支那からも大陸的なものを受けとめることの出来た祖先の姿であらう。西洋よりする組織的で異質な文明の開發と破壊とに対することの出来たのも、またこの腰骨の力と言ふことが出来よう。

古代と近代とを繋ぐこの国の中世はそこに隠れてゐた。¹³⁾

と述べている。日本人の「腰骨の強さ」こそ日本が「古代と近代とを繋ぐ」「中世」を有してきた賜物であり、その「中世」という歴史の賜物によって日本が今日まで西洋や大陸に抗して日本たりえてきたのであるとされている一文で

あるが、まさに藤村の文明批評の眼差しの結晶として評価できるところであろう。

こうした『東方の門』にしめされた藤村の確信は、昭和十一（一九三六）年九月にアルゼンチンのブエノスアイレスで開催された第一四回国際ペンクラブ大会に出席するために七月から翌年一月にかけての五ヶ月近く旅した海外への旅が大きな影響を与えたことも見逃せない。この旅はケープタウンを経由してブラジルに渡ってからブエノスアイレスに着き、国際ペンクラブ大会に出席し、帰路はアメリカにわたり、二十年ぶりのフランスも訪れている。この旅については昭和十二（一九三七）年五月から十五年一月にかけて発表した『巡礼』に詳しく書かれているが、特に『巡礼』の最後に、海外を旅した眼差しで日本を振り返り、「延び行く自分等の国の力を過小視するほど危ないことはない。同じやうに、それを過大視するほど危ないこともない。」とし、そして「内にはもつと自分等の持つて生れたものを延ばし、外は諸外国の侮りを防がねばならない。」¹⁴としている点は『東方の門』における「腰骨の強さ」を強調する日本観に通じる重要な認識である。

『東方の門』は、そうした藤村の国際的視野においての日本認識であり、日本の文化文明のありようを東西文化・思想の対比において壮大な文明批評を繰り広げた岡倉天心が残した書物に学びつつ総合的な視点で書こうとした重要な作品であった。『東方の門』は昭和十八（一九四三）年一月から「中央公論」に発表が開始され、八月二十一日に第三章を執筆中に脳溢血の発作で倒れて中絶された作品である。藤村はそのまま昏睡、二十二日に帰らぬ人となった。最後の作品となったこの作品にかける藤村の思いが示されたのが「東方の門を出すに就いて」である。

長いことわたしも黙し勝ちに日を送つて来たから、さだめし読者諸君の中にはめづらしく思つて呉れる方もあらう。作者としてのわたしは、日頃の自分の願ひとしても、成るべくやさしい言葉でこれを綴るであらうと言へるのみで、これが小説と言へ

るかどうか、それすら分らない。すべては試みである。ともかくも書いて出て見る。実はこの作、戦後にとつて、その心支度をしながら明日を待つつもりであつたが、かねて本誌編集者に約したことも果たしたく、いさゝか自分でも感ずるところあつて、かく戦時の空気の中でこの稿を起すことにした。周囲を見れば、親近の青年等まで修業期間を短縮し、銃後にあるものも皆各自の生存のために戦ひつゝあつて、眼に触れ耳に触るゝもの人をして深省を發せしめることばかり。戦争が長引けば長引くほど時局はますます重大性を加へて来た。こんななげしい禍の中に立つて、筆執ることは一層身にしてみるばかりでなく、今の自分の老弱に想ひ到れば美に何事も容易ではない。でも、あの昔の長道中に向ふ人達が旅立ちのやうに、わたしは荒々しく踏み立てることを慎まねばならぬ。他が一日で行ける路に三日も四日もかゝつても、心しづかにこの長い仕事を踏み出さねばならぬ。⁵⁵

藤村は、世界戦争が終つてから書き出そうと考えて「その心支度をしながら明日を待つつもりであつたが」予定を変更して、「いさゝか自分でも感ずるところあつて」「戦時の空気の中でこの稿を起すことにした」のはいかなる理由であつたのか。「親近の青年等まで修業期間を短縮し、銃後にあるものも皆各自の生存のために戦ひつゝあつて、眼に触れ耳に触るゝもの人をして深省を發せしめることばかり」と記したのはいかなる心情に基づいたものなのか。

いづれにしても「これが小説と言へるかどうか、それすら分らない」と述べ、また静子夫人に対しても「今度の事は実にむずかしい、『夜明け前』を書く時、冒険だと思つたが、更にそれより冒険だ」と言つて書き始めたこの『東方の門』は、戦争が次第に深刻さを増していく中で、まさに作者の全てをかけた「行動」であり、それは、小説家としての使命感と云うよりも、もつと、根本の、日本人としての緊迫感に於いて、日本の現在と未来を案じる作者の、切迫していく戦時下にあつて、それでも、改めて、「西」に対する「東」の「門」として日本が真に「活きかえる」ための可能性を求め、それを特に若者たちに一刻も早く訴えなければならぬとして描き始めた作品であつたと

言えよう。

残された創作ノート（「雑記帳」（い）（ろ）の膨大さから推測すれば、恐らく、全てが書き上げられたなら、藤村の日本人論を基調にした壮大なドラマが完成したであろうと考えられる。吉本隆明が、「藤村はこの作品で、おそらく青春期以来いだきつづけてきた漠然たる自己の思想性に形を与えてもいいと判断した。（中略）痛ましいといえ、この作品は痛ましいと思う。」と述べているが⁴⁰、見方を変えれば、藤村は今、東洋と西洋、日本と西洋における「東と西」の関係を、六十五歳になって南米アルゼンチン・ブエノスアイレスからアメリカ・ヨーロッパを旅した眼差しと、昭和十六（一九四一）年末から始まった第二次世界大戦の深刻な戦時下にあつて痛切に実感する相対化の視点に立つて改めて眺め直し、日本と日本人がこれからいかにあるべきかを鮮明にしようとした誠^{まこと}に貫かれていたことが十分に推測できる作品だと言えよう。

藤村は『東方の門』を「これが小説と言へるかどうか、それすら分らない」と述べ、しかし力強く、日本の「中世」の存在を誇り、そして何よりも日本は、西洋に対して「東」の門であれと強調した。おそらく、戦後に書こうとして長い時間をかけていたためいたものをこうして急いで執筆を開始したのは、おそらく自らの人生の終焉を感知したのであろうかも知れないが、何よりも困難を極めてきていた世界大戦下にあつて、若者の精神を鼓舞し、誇りを持って生きる事を促そうとした、まさに文明批評家としての最後のチャレンジがこの作品に凝縮されていると見ることが出来るのである。

註(1) 『海へ』『地中海への旅』（大正六（一九一七）年六月・一〇月「中央文学」）、『藤村全集』第八巻、筑摩書房、昭和四十八（一九七三）年九月十日、六三～六四頁。

- (2) 『眼鏡』『藤村全集』第五卷、一六三頁、一六五頁。
- (3) 『水彩画家』『藤村全集』第二卷三二一頁。(以下『水彩画家』の引用は同書による。)
- (4) 「破戒」の著者が見たる山国の新平民』『新片町より』明治四十二(一九〇九)年九月、『藤村全集』第六卷、七七〜七八頁。
- (5) 『家』新刊予告 明治四十四(一九二二)年十月一日、『白樺』第二卷第十号。
- (6) 『家』(下九)『藤村全集』第五卷、三八一〜三八二頁。
- (7) 今橋映子「都市論者・島崎藤村」パリ滞在と「公園」論の位相』『島崎藤村 文明批評と詩と小説と』双文社出版、一九六六年一〇月、三八頁。
- (8) 「芥川龍之介君のこと」昭和二(一九二七)年一月、『市井にありて』所収、『藤村全集』第一三卷、五四頁。
- (9) 『平和の巴里』「音楽会の夜 其他」(大正三(一九一四)年四月二六日)、『藤村全集』第六卷二九七頁。
- (10) 『海へ』「故国を見るまで」十一、『藤村全集』第八卷、一一一頁。
- (11) 『東方の門』第三章五、『藤村全集』第十四卷一一八頁。
- (12) 『夜明け前』第一部第十二章六、『藤村全集』第十一卷五三二頁。
- (13) 『東方の門』第二章六、『藤村全集』第十四卷九八頁。
- (14) 『巡礼』「故国の島影を望むまで」『藤村全集』第十四卷三二九〜三三〇頁。
- (15) 『東方の門を出すに就いて』『藤村全集』第十四卷、五頁。
- (16) 吉本隆明「東方の門」私感』「文芸読本島崎藤村」河出書房新社、昭和五四(一九七九)年六月、五九頁。

本稿は、二〇一六年九月二四日、小諸市市民交流センター「ステラホール」にて開催された「島崎藤村学会」第四三回全国大会にて「島崎藤村における国際性と文明批評」と題して記念講演をしたものをもとに大幅に加筆修正したものであることをお断りしておく。

(ほそかわ まさよし・関西学院大学文学部教授)